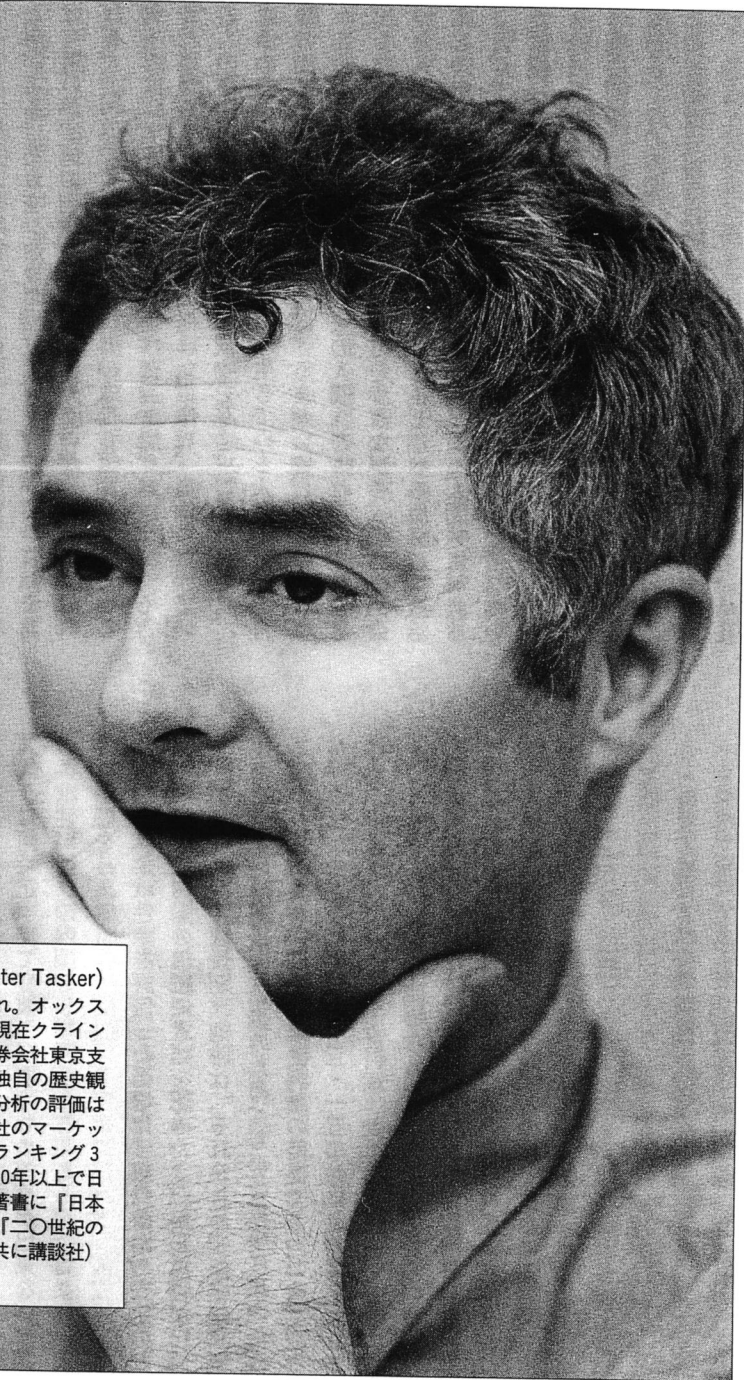


日本を生きる外国人① 今橋映子の著者と語る



ピーター・タスカ (Peter Tasker)
1955年イギリス生まれ。オックスフォード大学卒業。現在クライノート・ベンソン証券会社東京支店ストラテジスト。独自の歴史観と国際的感覚による分析の評価は高く、日本経済新聞社のマーケット・アナリスト人気ランキング3年連続第1位。滞日10年以上で日本語はとても流暢。著書に『日本の時代は終わったか』『二〇世紀の崩壊 日本の再生』（共に講談社）など多数。

語りかける 本たち Books

日本人による 新「日本観」を求め

ピーター・タスカ (証券アナリスト)



この春、編集部より「今一番、ご自身が興味をもっている書物の書き手との対談をしてみませんか」とのお誘いを受けた時、正直言って随分とまどった。今でも、自分は「書斎の人」でありたいと願っている私には、著者は、著書を通してのみ読者と対面すべしとの「古風な」信念がある。その上、専門の異なる領域の著者と、刺激的で実り多い対談を実現する力など、果してあるだろうか……。いわば編集部の熱意に負けて、乗ってしまった舟なのであるが、せめて、それならば何回かの対談に、何らかの一貫したテーマを設定したいと考えた。

私自身は、比較文学・比較文化という領域を専門とし、この十年ほど、日本人とパリとの関係を、政治、歴史、文学、美術など諸分野を横断するあたりで研究してきた。この数年パリでは、日本人に限らず、外国人にとつてのパリの意味を探る研究が盛んだが、その背景には、総人口比10%を超える外国人たちと、いかに「同化なき共存」をはかっていくかという切実な問いがある。

そこで翻って考えてみれば、現代日本もまたその例外ではない。政治・経済のみならず、もはや閉じた体系のなかで充てることのできない現代日本の様々な側面を、この対談をきっかけとして私自身考え直してみたい。その際、日本に在住する外国籍の著者に限ってみたのは、いわば、日本の内部

そこで浮上したのが「日本を生きる外国人」というテーマである。

にある「外」の眼を、私たちもまた獲得し、今、ここにある問題に、積極的な発言を呈する著者たちの声に耳を傾けたいと願ったからである。十九世紀の「ジャポニザン」(日本文化研究者たちとは異なって日本語に堪能であり、かつてのオリエンタリズムやエキゾチシズムとも違って、共に現代社会を生きて、しかも「日本を生きている」方々との対談なら、比較文

化を研究する立場から、私自身、積極的に話し合ってみたいと思う問題もある。
このコーナーが従来のような、外国人による「日本文化論」の御説拝聴という場ではなく、「日本とは」あるいは「現代とは」という、より大きな議論に一石を投じることができればと願っている。

今橋 今度の『日本は甦るか』(講談社)を加えると、経済問題を中心とした日本についての著書、この二年間で三冊も出されたわけですね。私は比較文化が専門で、経済には詳しくありませんので、今日は視点を変えて、「日本文化論」としてのタスカ・レポート」という形でお話を伺えればと思います。まず、日本についての研究をなさるようになった経緯からお話し頂けますか。

タスカ 一九八二年にイギリスを離れ、いま勤めている証券会社の東京支店に赴任したんですが、私には「日本にいる」という実感がほとんどないんですよ。たとえばお茶や空手、俳句や歌舞伎といった、日本の伝統への興味があつて日本に来たわけではなく、私にとっての日本

は、他の近代化された社会と同じなんです。だから、日本的エキゾチシズムに魅力を感じて日本を研究するようになったわけではないんです。
しかし、本来の経済関係の仕事以外にも、さまざまな面で日本社会に接してきた結果、私たちとは若干違うルーツや厚みがあり、いくら勉強しても知り尽くせない複雑で興味深い国であるという感じですね。

今橋 十二年近く東京に住んでおられて、率直にどんな感想をお持ちですか。
タスカ とてもいいところだと思います。ヨーロッパでは、少しお金の余裕ができた人々は都会から離れたがるんですよ。東京では、それはまず無理ですね。でも、別の面白さがある。ただ、仕事を

するだけの場所ではないと思うんです。
今橋 執筆は日本語でされるとのことですが、お話を伺っていてもとても日本語がお上手ですが、そこまで上達したのは日本にいらっしやうって、やはり仕事の関係で？
タスカ それもありますが、もう一つは、東京という都市が、とても開放的であまり保守的ではないことも大きかったと思います。
今橋 では、イギリスではまったく日本語に接したことはなかったんですか。
タスカ ないですね。
セルフィメージの変革が重要

今橋 ところで、「日本は甦るか」とい

う本を私なりの視点から要約してみますと、次のようになるかと思えます。
全体の大きなテーマは「リストラ」についてですが、大事なものは、現在の状況を世界的視野での「グローバル・リストラ、クチュアリング」の時代としてとらえ、そのなかで日本をどう考えたらいいのか、ということですよ。

その際一番大事なことは、日本の「セルフイメージ」を変革する必要があるということ。日本人が考えている、あるいは外国人が考えている、横並び意識や製造業に代表されるモノ作りなどにこだわっている日本人の国民性をそろそろ考え直す時であると指摘されていますね。そして、日本人の中にある独自の創造力をこれからもっと開発すべきで、「穏やかさ」ではなく「迫力」こそがこの不況を乗り切っていく大きな力になるのではないかともおっしゃっています。

ソ連が崩壊し、世界が資本主義の道を歩むとすると、今後は発展途上国と呼ばれている国々が「世界の工場」になる。その時重要になるのはサービス産業であ

って、日本自体がいままで歩んできた「工場国としての日本」というセルフイメージそのものを変えていかなければならない。そうすると「日本は日本」とか「外国は外国」とか、そういう発想はこれからの日本の発展を妨げる。



いまはし・えいこ
筑波大学専任講師(比較文化)。1961年東京生まれ。東京大学大学院修士。学術博士。著書に『異都憧憬——日本人のバリ』(渋谷・クロード賞)など。

日本では研究開発と技術の向上ばかりをとにかく重視して、相手が何を望んでいるかという、いわばカスタム・ヴァリュ(顧客のニーズ)をつかむためのマーケティングが弱い。グローバル・マーケットに進出するヴィジョンと勇気が日本企業に欠けているとの指摘も、興味深く読みました。
タスカさんの本は内容豊富で、適切な要約になったかどうかわかりませんが、ここで述べられた提言が実際、日本の中で受け入れられ、日本が変わっていくと思われませんか。
タスカ それはわからないですよ(笑)。これは中長期的な課題で、今年とか来年という期間で判断できないですね。製造業からサービス産業への構造転換は、もう止められない傾向です。けれどそれを、仕方なくやるか、積極的なヴィジョンをもってやるかが重要なことですよ。

私はこの本で、単なる経済の話だけでなく、政治の問題や社会の価値観も関連する重要なテーマとして論じました。グ

ローバル・リストラというのは先進諸国にとつてたいへん大きな問題ですが、最近の日本では伝統的価値観への回帰願望といった国家意識(ナショナリズム)が強まっているような気がします。この現象は日本社会のいろんな面で起こっています。いまの日本は、国際化に向かうよりも、むしろ内向きになっているのではないのでしょうか。

それは、経済の健全な発展や日本の真の国際化を阻害する要因になるかもしれない。そのポイントをついているのが、小沢一郎氏の言う「普通の国」です。彼が対象としているのは政治の世界ですが、「普通の国」だけではなく、「普通の企業」「普通の生活」「普通の何々」を指すことが大切なんです。しかし、今は、「特殊な国」「特殊な企業」「特殊な雇用システム」「特殊な歴史観」など、日本の「特殊性」を守るといふアイデンティティを重視する方向に向かっている。ですから、グローバル・リストラへの対応の問題は、日本が国連の常任理事国になったからといって解決するような問題ではなく、非

常に深い日本人の心の問題ですね。

日本での議論に参加するために

今橋 タスカさんは、「エピソード」の最後の「日本」とはなにか」の箇所、「ジャパン・ウォッチャー」という言い方をしていますよね。

最初のジャパン・ウォッチャーであるラフカディオ・ハーンによれば、日本は「鏡」のようなもので、それを見ている人自身の姿がその中に浮かんでくる。だから見る人によつて、まったく違う日本の姿が見えてくる。したがって、今後どういう「日本観」を人々が選択するかということが何よりも重要であるとおっしゃっていますね。

青木保さんは「日本文化論」の変容(中央公論社)の中で、その時々さまざまな日本文化論は、日本人あるいは外国人の同時代論そのものだと指摘しているのですが、八〇年以降の日本を見てこられたタスカさんご自身は、従来のジャパン・ウォッチャーと自分はどこが違うと

思っていますか。

タスカ 私は学者ではありませんから、ちょっと比較できないかもしれませんが、とくにアメリカは、日本を近代化という視点から見ていると思いますね。その場合、どうしても政治的な意味合いが強くなる。「進歩イコール近代化」という概念によつて、日本の社会をはかるわけですね。いずれ日本でも近代化のプロセスが完成されて、西洋的な文化・社会がつくられる、そういう考え方です。

もう一つは、いわゆるオリエンタリズムという視点です。日本をオリエンタリズムの国と考えるわけですが、そのオリエンタリズムというのは、そもそも西洋が東洋の文物を指して使った言葉で、そのような西洋的視点から発言する国は東洋のなかで日本だけです。しかも日本は、西洋の国々に対しても同じ発想で見る傾向があるんですね。

今橋 タスカさんは、オリエンタリズムという視点抜きに「等身大の」日本を見ることのできるジャパン・ウォッチャーとして、日本の問題を、アクチュアル百貨店の和食コーナーのつくりなどはそのいい例です。

日本の歴史や日本人の国民性や日本的なものとは何かということも、すべてオリエンタリズムの発想で考えているんですね。たとえば日本の終身雇用のシステムは日本の国民性に立脚していると一般的には言われますが、しかし、戦前にはなかったものですね。ですから、「いまあるものは日本的で、昔のルーツとどこかでつながっている」というオリエンタリズムは、ある意味では不健全だと思いますね。

今橋 それは経済にとつて不健全ということですか。

タスカ それだけじゃないですね。人の付き合い方もそうですね。世界に向けて日本人や日本文化の特殊性を主張するのは健全とはいえないんじゃないでしょうか。あらゆる面で基本的に共通点が多い。その見方が非常に大事ですね。

今橋 この本の中でも、いまは特殊という殻のなかに閉じこもっている時代ではないとおっしゃっていますね。では、

な国際的な問題として海外へ伝えるということを考えていらつしやいませんか。例えば、この本の英語版とか……?

タスカ 考えていません。というのは、これは、九〇年代の日本が政治や経済の面でどうなるかということと、「外国人に伝えるため」に書いたのではなく、私自身が一人の人間として「日本での議論に参加するため」に書いたんです。

今橋 そういう意味でもタスカさんのお仕事の中心は日本にあるわけですね。日本での議論に一個人として参加するというところに、ご自分の仕事の意味を感じていらつしやる。

タスカ そうです。日本の現状を海外に伝えるのも価値があるとは思いますが、しかし、それを理解できる「知識人」というものはないんですよ。特定の分野について深い知識を持っている人はいますが、すべての分野をカバーできるオールマイティな知識人はもういません。

その意味でマスコミの発達は社会の成熟にとつて非常に大事ですね。筆者やメ

ディアに対して信頼感があれば、自分ですべてを調べ研究しなくても、正しい知識が吸収できるんです。ですから、今日、マスコミのレベルの高さが非常に重要ですね。そして、情報を吸収する意欲は自動的に起きるものではなく、必要性があるからこそ起きるんですよ。

今橋 信用に足るだけの情報をマスコミが提供することは、今日のような高度情報化と知識の細分化が進んだ社会では本当に重要なことですよ。

特殊性の主張は不健全

今橋 最後に、この本で言い足りないなかつたこと、読者に伝えたいメッセージがありましたらお聞かせ下さい。

タスカ そうですね……まずオリエンタリズムの話ですが、日本人は日本に対してオリエンタリズムをもつて考えすぎる傾向があるんですね。日本人ももはや伝統的なものから離れて日常生活をしていますから、日本的なものをすべてオリエンタリズムの発想でくくってしまう。

普遍というものはどこにあるか。ヨーロッパやアメリカにあるのか……。

タスカ いや、それはわからないです。近代化は普遍的な価値であるとはもう誰も信じていない。でも、完全な相対論もちょっと危険性があると思います。普遍というものはまだ誰も見つけていないと考えたほうがいいですね。

今橋 私もそう思います。

タスカ 日本の躍進により、いまは「近代化イコール西洋化」という単純な発想そのものが問われています。この二、三百年の間、西洋が凌駕してきた先端技術の世界で、戦後の日本はめざましい成果をあげてきた。そして、経済やビジネスの世界でも成功を収めてきましたが、その背景には文化的な意味があると思いませんか。

小さな例ですが、たとえばウォークマンという商品は、日本の企業以外ではできなかったかもしれない。日本の大都会の現状や生活感覚から生まれた発想だと思えます。

「近代化イコール西洋化」という図式

今回は、氏の最新刊『日本は甦るか

(Will Japan be ready in time for the coming Second Golden Age of Capitalism?) (講談社、一九九四年七月をとり上げた。断るまでもなく、本書の大きな目的の一つである日本経済の現状分析について、畑違いの私としては評価する資格はない。それは今後の専門家の批評を俟ちたいと思う。むしろここでは、本書が一般書として書かれたがゆえに、性格的に備わざるを得なかった「現在、日本論」の側面に注目してみた。

青木保氏の著書『日本文化論』の変容——戦後日本の文化のアイデンティティ——(中央公論社、一九九〇年)によると、一九四五年より九〇年までに内外で書かれた「日本文化論」の総数は、二千点を上回るだろうという。うっかりすると「大衆消費財」になりかねない多くの日本文化論の中から、青木氏は代表的著作を選挙し、それを時期的に四期に大別して、各々を性格づけている。第一期(四五〜五四四年)は、桑原武夫『現代日本文化の反省』

にみるような、敗戦直後の「否定的特殊

のものが、グローバル・リストラの時代のもう一つの大きな挑戦ですね。

今橋 先ほどタスカさんは「日本での議論に参加するため」に、この本を書かれたとおっしゃいましたが、これからどんな方々と議論していきたいと思っいらっしゃいますか。

タスカ 世界や日本についての問題意識を持つている柔軟性のある人々ですね。もつとも、「何で外国人が書いた日本論を読まなければならないのか」という人もいるかもしれない(笑)。それも、わ

〈対談を終えて〉

ピーター・タスカ氏と、私とは、いわば同世代の人間である。戦後の高度成長期に育ち、六十年代・学生闘争の次の時代に、青春をすごした世代である。タスカ氏との対談を終えて、改めて印象づけられたのは、カルチャー・ショックなどという状況をほとんど経験したこともなく、さばさばと東京生活を楽しんでいる

性の認識」の時代。第二期(五五〜六三年)は、加藤周一「日本文化の雑種性」、梅棹忠夫「文明の生態史観序説」の両論文に展開された、グローバルな視野にもとづく「歴史的相対性の認識」の時代。第三期(六四〜八三年)は、中根千枝『タテ社会の人間関係』土居健郎『甘え』の構造』からエングラ・ヴォーゲル『ジャパン・アズ・ナンバーワン』に至る、今でも私たちの記憶に新しい、「日本文化論」の隆盛と、それが「肯定的特殊性の認識」を表象する時代である。そして青木氏は一九八四年以降の第四期を「特殊から普遍」の時代と位置づけている。「日本的」であると言われる政治、企業、社会構造、人間関係などの「特殊性」が、戦後日本の成功をもたらした——とするナルシズムや、ナシヨナリズムが、八〇年代に一転して、外国からの「日本叩き」の対象となったという事実をふまえ、その双方の論調に欠けている文化相対論的視点を指摘している。

タスカ氏の著書は、否応なく世界経済の動向の鍵をにぎっている九〇年代日本

からなくはない。日本人が書いたイギリス論はイギリスでそんなに売れるものじゃないでしょう。(笑)

今橋 でも、日本では売れるんですね。(笑)

タスカ ただ、私の本を読んだ人に、少しでもいままでとは違ったポイントを発見してもらえれば、「あっそうか」という反応してもらえれば、非常にうれしいですね。

今橋 ありがとうございます。

(一九九四年七月二十九日収録)

同世代人の姿だった。それは、タスカ氏の専門的職業が、証券アナリストであることも大いに関係しよう。バブル時代の前後十年以上にわたり、日本経済の動向を分析し続けてきた氏の著書は、この不況時代、むしろこれからの日本を占う書として、一般には読まれているようである。

の現在を対象としているという点で、「日本的」なるものを肯定的にせよ、否定的にせよ強調するという立場から遠く隔っている。その意味では、氏自身もこの対談で明言する通り、タスカ・レポートは、「現代日本の様々な議論に、自らも参加する」意欲を、強く示していると言えるだろうし、だからこそ本書を叩き台とした将来の対話にこそ、この本の真の価値が発揮されるのだろうと思った。

最後に一言——タスカ氏は本書の中で、フロンガスのオゾン層破壊の問題を重要視すべきでない(二五五〜一五六頁)との見解や、リサイクリング運動が経済規模を縮小する(二五八頁)という意見など、私には意外に思える点をいくつか示しておられるが、これについて詳細にお聞きする時間がなかったのが残念であった。この二年間に三冊もの書物を一般読者に向けて著してきたタスカ氏に、今度は、データや引用の典拠を明記し、しかも専門に偏らない、より本格的で精緻な「日本文化論」を期待したい、というのが、私の一読者としての願いである。